国際学院埼玉短期大学研究紀要2022

実践報告

保育者を目指す学生の視野を広げる取組
― 新聞記事を読む活動を通して ―
Efforts to Broaden the Horizons of Students Who Want To Be Nursery School Teacher
― By Reading Newspaper Articles ―

中村敏男　　国際学院埼玉短期大学幼児保育学科

実習で現場の様子に触れる以外は、幼い子どもたちを取り巻く様々な事象に目を向けることの少ない学生の実態に鑑み、保育・幼児教育・子育てなどに関する新聞記事に触れ、視野を広げる授業実践に取り組んだ。授業中に新聞記事を読み感想をメモする。自宅学習としてメモをもとに感想を文章にまとめ、Microsoft　Teams のチャット機能を使って授業者に送信する。授業者はコメントを付けて返信し、名簿順にクラスの仲間 2 名を指定して転送させる。互いに仲間の感想やそれに対する授業者のコメントを読み学びを深める取組である。学生は、事件・事故以外にも幼い子どもについての様々な報道がなされていることに関心を持つようになり、また同じ一つの記事でも、様々な受け止め方があることに気づくようになった。また、文章表現が苦手という学生も、回数を重ねる中で、自分の考を一定程度の分量の文章で表現することに慣れてきた様子が見て取れる。学生の負担感を軽減し、保育者を目指す者としての視野をさらに広げることが今後の課題となる。

キーワード：新聞記事・保育者を目指す意識・視野の広がり

１．はじめに

この実践は、令和 4 年度前期 1 年生の「保育者・教職原論」における取組である。履修者は 102 名（うち再履修の 2 年生 6 名、委託訓練生 3 名を含む。）である。「保育者・教職原論」の授業は、保育者として必要な基礎的知識や心構えを身に付けることをねらいとしている。授業はシラバスに沿って、毎回のポイントをテキスト（「保育者論－主体性のある保育者を目指して」野津直樹・宮川萬寿美　編著　萌文書林）を通して把握し、理解する。毎回、学修資料（ワークシート）を用意し、授業のねらいに沿ってできるだけ集約的にポイントを把握し、課題に対する自分の考えを持つことができるような授業展開に努めた。またコロナウィルス感染防止に十分配慮しながら、周囲での話し合いやグループワークも取り入れ、課題に対する自分の考えを深め、感じたことや考えたことなどを文章化させることも重視した。自分の考えを文章化することで、学修の定着・深化を図ることができると考える。学生もそれなりによく集中して学修に臨んでいた。しかし、ややもするとポイントを把握するだけで満足してしまったり、それが幼児教育・保育のすべてであるかのような錯覚を持ってしまったりする場合もあった。その結果、授業で学んだことと実習先で体験する現実とのギャップに戸惑うというようなケースも散見された。インターネット、SNS など様々な情報があふれる環境の中にありながら、専門性の高い保育者を目指す者と

して、自分にとって必要な情報を積極的に収集するという姿勢が育っていないという現実がある。そこで、テキストを中心とした学びと並行して、幼児教育や保育、あるいは子育てなどに関する新聞記事を読み、保育者の仕事の現実を認識するとともに、幼児教育や保育を取り巻く様々な問題を知ることによって、視野を広く持つことができるように意図した。

２．取組の内容

授業のはじめに、学生は 5 分程度の時間で集中して学修資料（図 1）の記事を読み、その後「この記事は、保育者にとってはどんな意味があるのか」「自分が保育者の立場だったらどのように対応するか」といった視点から、気づいたことや感じたことを簡単にメモする。指名された学生が感想を発表する。他の学生は、自分の感じたこととの違いなど、発表される内容を聞いて感じたこともメモしながら発表を聞く。自宅学修として授業中のメモを活用し、改めて感想をレポートにまとめて、授業者に送信する。また、クラスの仲間から送信される感想や授業者のコメントを読む。授業後の課題ではあるが、学生の負担を考慮し、提出締め切りまでの期間を 4 日間設定した。

授業者は、チャットで送信されてくるレポートを評価したうえで、コメントをつけて返信する。その際、自分のレポートと授業者のコメントを、クラスの 2 名の学生に送信することを指示する。（送信相手の 2 名は、名簿順に授業者が指名する。）その回の記事について、クラスの 2 名の仲間のレポートや授業者のコメントを読むことで、学びを深める機会とした。提示した記事のポイントや、学生の感想の傾向等については、次の授業の「前回の復習」のコーナーで触れた。

2-1　取り上げた新聞記事の実際

提示する新聞記事は、幼児教育・保育の領域に関わる内容のものとしたが、具体的には子育て支援、家庭生活、投稿記事、幼児の言葉など多彩な内容となる。提示した各回の新聞記事のタイトル等を表 1 に示す。

表１　各回の授業で提示した新聞記事のタイトル、新聞社名、発行日等

授業回数	内容（新聞記事のタイトルから）	新聞社名	発行日	備考
第 1 回	№1 保育士 45 年で退職 幸せだった日々	読売新聞	R4. 3. 26	
第 2 回	№2 感染拡大、保育現場に影響	埼玉新聞	R4. 1. 31	
第 3 回	№3 先生のお顔見えるよ	読売新聞	R4. 4. 12	学生提供記事
第 4 回	№4 ちょっと頑張るが理想	埼玉新聞	R4. 4. 12	
第 5 回	№5 幼少期からのＳＤＧｓ	下野新聞	R4. 4. 23	学生提供記事
第 6 回	№6 小 1 が園児のガイド役	読売新聞	R4. 5. 11	
第 7 回	№7 気流　ウクライナの惨状 孫おびえる	読売新聞	R4. 4. 22	投稿欄の 2 つの記事を比較
	№7 気流　子供の問い 教える機会		R4. 5. 18	
第 8 回	№8 キラキラネーム OK に？	埼玉新聞	R4. 5. 18	同一テーマについて他紙の比較
	（号外）「キラキラネーム」容認範囲は？	読売新聞	R4. 6. 1	
第 9 回	№9 叱らず小さな成長褒める	読売新聞	R4. 5. 27	学生提供記事
第 10 回	№10 園児置き去り 報告急増	朝日新聞	R4. 6. 2	学生提供記事

第 11 回	（「最終レポート」の説明のため新聞記事を読む学修 1 回休止）	―	―	―
第 12 回	№11 重い車体、転倒死事故も	下野新聞	R4. 5. 10	学生提供記事
第 13 回	№12 お絵描きは自分の表現	読売新聞	R4. 6. 24	学生提供記事
第 14 回	№13 大人も絵本　心通わせる	読売新聞	R4. 6. 28	
第 15 回	№14　(1)一緒にいた時間を思い出す	読売新聞	R4. 7. 2	表面に(1)、裏面に(2)～(5)どちらかのコースを選択して感想を書く。
	№14　(2)編集手帳		R4. 5. 5	
	(3)こどもの詩　虫の音		R4. 4. 12	
	(4)　〃　こわいはなし		R4. 5. 14	
	(5)　〃　しりとり		R4. 5. 24	

※この他、第 15 回（最終回）の授業で「保育の現代的課題 ― 保育者のストレス ― 」というテーマに取り組んだ際、「つらい保育士　転職すべきか」という人生相談の記事を学修資料として取り上げた。（令和 4 年 1 月 17 日付け、読売新聞朝刊「人生案内」より）

2-2　提示した学修資料の実際

実際に配付した新聞記事に関する学修資料の例を図 1 に示す。

図１　授業で使用した学修資料の例（実物は A4 判、モノクロ印刷）

2-3　授業実践における取組の工夫

①毎回の授業の中で、新聞記事を読む場を設定した。

それまでも、授業内容と関連のある記事が掲載されたとき、それを学修資料として授業で取り上げることはあった。これを令和 2 年度からは、毎回の授業のはじめに（その回の学修内容

と切り離して）新聞記事を読む学修として展開している。その後、これまでの間、コロナウィルス感染防止対策の関係で、リモートによる授業や、60 分間の短縮授業、30 分間分の課題レポートなどの様々な形で授業が展開された。このため単純な比較検討が難しい状況ではあるが、不定期に提示するよりも、毎回の授業で提示する方が、当然ながら新聞記事に対する学生の関心の高まりは強かった。このため、令和 4 年度も毎回の授業で新聞記事を提示する形を取った。

②感想レポートの文字数の条件、評価基準を示した。

保育者を目指して学ぶ者として、提示された新聞記事に対する自分の考えを一定程度以上の分量の文章で表現することに重きを置いた。漠然とした印象や一過性の表層的な感想だけでは、学びを深めることは難しい。文章で表現することを通して問題に対する自分の考えを整理し、深めることができると考え、評価の基準となる文字数を学生にも提示した。今年度は、まず「400 文字以上書く」という基準を示し、それを（400 文字から 700 文字へ）段階的に引き上げる形を取った（表２）。

表２　授業後レポートの基準文字数

【№1～№3 の基準】→【№4～№6 の基準】→【№7～№10 の基準】→【№11～№14 の基準】

S	1000 文字以上
A	800 文字以上
B	600 文字以上
C	400 文字以上
D	399 文字以下

S	1100 文字以上
A	900 文字以上
B	700 文字以上
C	500 文字以上
D	499 文字以下

S	1200 文字以上
A	1000 文字以上
B	800 文字以上
C	600 文字以上
D	599 文字以下

S	1300 文字以上
A	1100 文字以上
B	900 文字以上
C	700 文字以上
D	699 文字以下

授業者のコメントのはじめに、提出されたレポートの文字数と評価を示して返信することで、次の取組への意欲を高めることにつなげた。

授業者の担当する他の科目や、この「保育者・教職原論」の「最終レポート」などは、手書きによるレポート作成を指示している。子どもの言葉の成長や文字の獲得に携わったり、保護者に連絡帳などによって連絡したりする保育者として、誤字や不適切な用語の使用は慎まなければならない。学生のうちから適切な文章表現や正しい文字表記の能力を身に付けておくべきであるという考えによる。しかし、今回の取組はワープロ入力によるレポート作成となる。誤字に対する指導はしにくくなるが、逆に文字数のカウントは比較的容易となる。この特性を活用して、一定程度以上の分量の文章作成に慣れさせることが可能となった。また、文字数とは別に、提出期限内で早く提出できた場合には「金メダル（初日提出）＋3 点」「銀メダル（2 日目提出）＋2 点」「銅メダル（3 日目提出＋1 点）」のような形で加点し、取組の意欲を高めた。

③注目すべきポイントや考えるべき方向性などの手引きを示した。

新聞記事の内容に対する学生の理解度や、これまでの学生のレポート作成状況を勘案すると、（昨年度までこの授業は後期に実施していたが、今年度から前期に移行したこともあり）入学したての 1 年生にとってはある程度の困難が予想された。負荷がかかりすぎて学修の意欲が減退するのを避けるために、新聞記事を提示する際にヒント（手引き）を書き添えた。単に感想の書き方のヒントを示すだけでなく、今後の学びにつながる内容となるよう留意した。学

生は回を進めるにつれて「記事の読み方」に少しずつ慣れて、手引きに頼ることなく自分なりの考えをレポートすることのできる学生も出てくるようになった。授業者のコメントでは、独自性のある読み方や考え方を評価するとともに、その記事のポイントから逸脱しないようにフォローするよう留意した。以下に、新聞記事に書き添えた手引きの具体例を示す。

（例 1）新聞記事 №1「保育士 45 年で退職 幸せだった日々」に付した手引き

○（一般の読者として）45 年間を「幸せな日々」と振り返る仲村さんについてどう思う？ ○（保育者を目指して学び始めた学生として）保育士としての仲村さん、保育士の仕事、定年・再任用…などについて何を感じる？

（例 2）新聞記事 №5「幼少期からの SDGs」に付した手引き

○幼い子どもたちへのＳＤＧｓの働きかけについてどう感じたかメモしてみよう。 ○「ネクスト社社長で大阪府立大３年の一柳翠さん」の存在について何を考えるか、メモしてみよう。 ○あなたが保育者になったら、ＳＤＧｓについて、どんな取組ができると思うか、メモしてみよう。

（例 3）新聞記事 №8「キラキラネーム OK に？」に付した手引き

○いわゆる「キラキラネーム」についてどう思うか、自分の考えを簡潔にメモしてみよう。 ○名前を付ける親の気持ちについて考えてみよう。（自分の名前を付けたときの親の気持ちや考えを聞いたことがあれば、それを聞いたときの感想をメモしてみよう。） ○保育者として園児の名前や、その名前を付けた親の気持ち、自分の名前に対する子どもの気持ちをどう受け止めるか、考えてみよう。

④可能な限り多くのコメントを付け、フィードバックした。

提出されたレポートは、単に文字数で評価するだけでなく、授業者からのコメントを返信することで、学修の深化を図るとともに、学修意欲を高めるよう留意した。昨年度まではポータルサイトを使ってのやりとりだったため、授業者のコメントは 400 文字以内の制限があった。今年度から Microsoft　Teams のチャット機能を使ってのやりとりになったため、授業者のコメントも文字制限を気にしなくても済むようになった。コメントは、着眼点やまとめ方のよいところを評価する内容とし、さらに深めるべき方向性を示したり、考えてみるべき課題を提示したりすることもある。また、文字数の制約がなくなったため、レポートの書き方のアドバイスとして、使用する用語、文体等についても必要に応じて指導することができた。毎回、全員のレポートにこうしたコメントを付け、フィードバックするのはかなりの作業量となるが、この取組のねらいに迫るための中心的な手立ての一つとなっている。

⑤学生自身にも新聞記事を収集させた。

新聞記事は原則として授業者が収集して授業で学修資料として提示するが、学生にも幼児教育や保育に関連する記事を収集し、提出するよう指導した。ただし、新聞を購読していない家庭も増えており、また特に一人暮らしの学生の多くは新聞を購読していないことが想定される。

そこで、新聞だけでなく、インターネットニュースの記事も収集の対象とした。提出は任意だが、授業では学生が収集して提出した記事を学修資料として提示する場合もあった（表１の備考欄参照）。学修資料に学生が提供した記事であることを明記して配付することで、新聞記事への注目度、関連記事の収集について意識を高めることができた。日常的に新聞やインターネットニュースに注目すること自体も保育者として仕事をすることに対する意識を高めたり、視野を広げたりするために必要な姿勢であると考える。

⑥学生同士で感想やコメントを交流した。

書いたことをもとに他者と交流することで、視野を広げ新たな知見を得る機会となる。このため自分の作成したレポートと授業者から返信された評価やコメントを、クラスの仲間に転送して互いに読み合う機会を持った。授業者はコメントを返信する際に、クラスの２名を指定する。授業者から返信を受けた学生は、指定された２名の学生に自分のレポートと授業者のコメントを送信する。また自分のところにも、クラスの２名から同じようにレポートとコメントが送信されて来ることになる。名簿順で、毎回一人ずつずらして送信する相手を指定するので、15 回の授業が終わるまでにはほぼクラスの全員とレポートやコメントを交換することができる。

2-4　新聞記事を読む学修についてのアンケート

第１回の授業で、新聞に対する学生の意識の現状を把握するアンケートを実施した。なお、本研究の倫理的配慮については、学生に、第１回の授業において、研究の目的、方法、本学研究紀要への公表等について、口頭による説明を行った。また、第 15 回（最終回）の授業では、取組の成果や意識の変容を確認するためのアンケートを実施した。実施したアンケートの質問項目は、それぞれ以下の通りである。

《 この授業を始める前の状況についての質問 》（第１回の授業で実施）

Ｑ１　新聞記事やニュースに関するあなたの環境を教えてください。あなたは（もしくはあなたの家では）、新聞を購読していますか。あなたはテレビやインターネットのニュースを見ますか。次の中からあなたの環境を一つ選び、番号で答えてください。

①新聞を購読しているし、テレビやインターネットのニュースも見る。
②新聞を購読しているので、テレビやインターネットのニュースはあまり見ない。
③新聞は購読していないので、もっぱらテレビやインターネットのニュースを見る。
④新聞は購読しているがほとんど読まないし､テレビやインターネットのニュースも見ない。
⑤新聞は購読していないし、テレビやインターネットのニュースもあまり見ない。

Ｑ２　Ｑ１で①②③のどれかを答えた人、どんな記事に関心を持っていましたか。番号で答えてください。（関心の強かった順に３つ答えてください。）

①社会面（事件・事故）　②社会面（政治・経済・法律など）　③社会面（国際情勢・海外

の記事）　④スポーツ関係の記事　　⑤芸能関係の記事　　⑥生活関係の記事（家族・健康・育児・介護など）　⑦文芸・文化関係の記事（詩・短歌・俳句・川柳・連載小説・歴史など）⑧読者の投稿欄　　⑨テレビ番組欄　　⑩社説やコラム（「編集手帳」「天声人語」「さきたま抄」など）　⑪株式市況欄　　⑫地域版　　⑬４コマ漫画　　⑭その他（人生相談・広告・天気予報など）

Ｑ３　Ｑ１で④か⑤のどちらかを答えた人、新聞を読んだりニュースを見たりしなかった理由を次の中から一つ選び、番号で答えてください。

①ニュースそのものにあまり興味や関心がないから。
②関心がないわけではないが、新聞を読んだりニュースを見たりする時間のゆとりがないから。
③身近でない問題や、難しい内容が多く、とっつきにくいから。
④身近に新聞がないし、わざわざテレビやインターネットのニュースを見る必要も感じないから。

《 この授業を始めてからの状況についての質問 》（第 15 回の授業で実施）

Ｑ１　＜新聞記事を読む学修＞を始める前と今とで、新聞（インターネットニュースも含む）についての関心の度合いは変化しましたか。それぞれ番号で答えてください。

【始める前】

①新聞には全く関心がなかった。
②新聞にはあまり関心がなかった。
③新聞への関心の度合いは普通だった。
④新聞への関心はけっこう高かった。
⑤新聞から様々な情報を得ていた。

【今】

①新聞には全く関心がない。
②新聞への関心はそれほど高くなっていない。
③新聞への関心の度合いは普通だと思う。
④これまでよりも新聞への関心が少し高くなった。
⑤これまでよりも新聞への関心がかなり高くなった。

Ｑ２　これまで授業で取り上げた以下の記事の中で、一番印象に残ったものを一つ選び、番号で答えてください。（「最終レポート」で取り上げたものと同じになります。）

①「保育士 45 年で退職 幸せだった日々」　②「感染拡大、保育現場に影響」　③「先生のお顔見えるよ」　④「ちょっと頑張るが理想」　⑤「幼少期からの SDGs」　⑥「小 1 が園児のガイド役」　⑦「ウクライナの惨状 孫おびえる／子供の問い 教える機会」　⑧「キラキラネーム OK に？」　⑨「叱らず小さな成長褒める」　⑩「園児置き去り 報告急増」　⑪「重い車体、転倒死事故も」　⑫「お絵描きは自分の表現」　⑬「大人も絵本　心通わせる」⑭「A 一緒にいた時間を思い出す」「B 編集手帳・こどもの詩」

Ｑ３　Ｑ２で答えた記事は、なぜ印象に残ったのですか。簡単に答えてください。

Ｑ４　返却されたレポートと授業者のコメントを、クラスの仲間に転送し、お互いに読み合いました。この学修について、感じたこと、考えたこと、印象に残ったレポートなどについて自由に書いてください。

Ｑ５　「保育者・教職原論」の「新聞記事を読む学修」について、感想や要望を自由に書いてください。

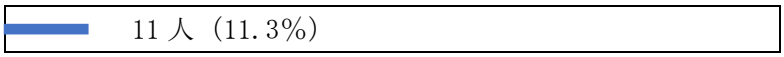
３．取組の結果

3-1　アンケートの集計結果

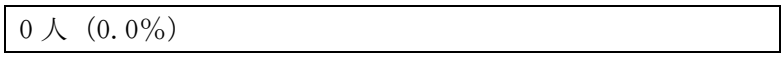
この授業を始める前の状況（第１回の授業で実施　　回答学生数９７名）

Ｑ１　新聞記事やニュースに関するあなたの環境を教えてください。あなたは（もしくはあなたの家では）、新聞を購読していますか。あなたはテレビやインターネットのニュースを見ますか。次の中からあなたの環境を一つ選び、番号で答えてください。

①新聞を購読しているし、テレビやインターネットのニュースも見る。

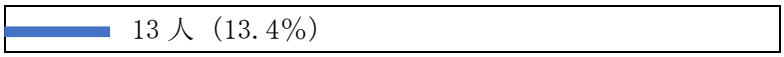


②新聞を購読しているので、テレビやインターネットのニュースはあまり見ない。

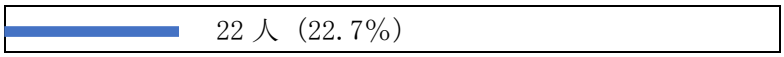


③新聞は購読していないので、もっぱらテレビやインターネットのニュースを見る。

④新聞は購読しているがほとんど読まないし､テレビやインターネットのニュースも見ない。



⑤新聞は購読していないし、テレビやインターネットのニュースもあまり見ない。



Ｑ２　Ｑ１で①②③のどれかを答えた人、どんな記事に関心を持っていましたか。番号で答えてください。（関心の強かった順に３つ答えてください。）

①社会面(事件･事故)　②社会面(政治･経済･法律など)　③社会面(国際情勢･海外の記事)
④スポーツ関係の記事　⑤芸能関係の記事　⑥生活関係の記事(家族・健康・育児・介護など)
⑦文芸･文化関係の記事(詩･短歌･俳句･川柳･連載小説･歴史など)　⑧読者の投稿欄
⑨テレビ番組欄　⑩社説やコラム(「編集手帳」「天声人語」「さきたま抄」など)
⑪株式市況欄　⑫地域版　⑬４コマ漫画　⑭その他(人生相談･広告･天気予報など)

【関心の強かった記事上位５件】

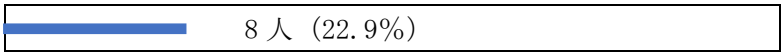
（Ｑ１で①②③と答えた 62 人について、一人３件の複数回答に対する単純集計）

1 位	①社会面(事件･事故)	41 人
2 位	⑤芸能関係の記事	36 人
3 位	⑥生活関係の記事(家族・健康・育児・介護など)	25 人
4 位	③社会面(国際情勢･海外の記事)	24 人
5位	⑨テレビ番組欄	17 人

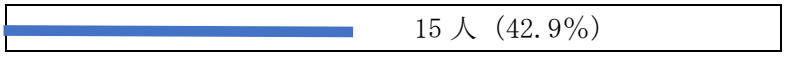
Ｑ３　Ｑ１で④か⑤のどちらかを答えた人、新聞を読んだりニュースを見たりしなかった理由を次の中から一つ選び、番号で答えてください。

（Ｑ１で④⑤と答えた 35 人について）

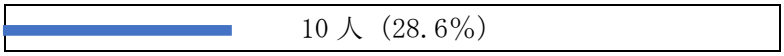
①ニュースそのものにあまり興味や関心がないから。



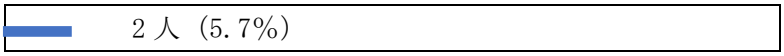
②関心がないわけではないが、新聞を読んだりニュースを見たりする時間のゆとりがないから。



③身近でない問題や、難しい内容が多く、とっつきにくいから。



④身近に新聞がないし、わざわざテレビやインターネットのニュースを見る必要も感じないから。



この授業を始めてからの状況（第 15 回の授業で実施　回答学生数８７名）

Ｑ１　＜新聞記事を読む学修＞を始める前と今とで、新聞（インターネットニュースも含む）についての関心の度合いは変化しましたか。それぞれ番号で答えてください。

今 ＼ 始める前	①新聞には全く関心がない	②新聞への関心はそれほど高くなっていない	③新聞への関心の度合いは普通だと思う	④これまでよりも新聞への関心が少し高くなった	⑤これまでよりも新聞への関心がかなり高くなった	計
①新聞には全く関心がなかった	1	6	１１	２５	3	46
②新聞にはあまり関心がなかった			2	２３	5	30
③新聞への関心の度合いは普通だった				8	2	10
④新聞への関心はけっこう高かった			1		0	1
⑤新聞から様々な情報を得ていた					0	0
計	1	6	14	56	10	87

回答者８７人中、

【始める前】に①か②と答えた学生７６人の中で、【今】③④⑤と答えた学生６９人

【始める前】に③と答えた学生１０人の中で、【今】④⑤と答えた学生１０人

【始める前】に④と答えた学生１人の中で、【今】⑤と答えた学生０人

→合計７９人（回答者全体の９０．８％、表の太枠部分）が、学修を通して、新聞記事やニュースへの関心が高まったと考えられる学生

Ｑ２　これまで授業で取り上げた以下の記事の中で、一番印象に残ったものを一つ選び、番号で答えてください。（「最終レポート」で取り上げたものと同じになります。）

①「保育士 45 年で退職 幸せだった日々」　②「感染拡大、保育現場に影響」　③「先生のお顔見えるよ」　④「ちょっと頑張るが理想」　⑤「幼少期からの SDGs」　⑥「小 1 が園児のガイド役」　⑦「ウクライナの惨状 孫おびえる／子供の問い 教える機会」　⑧「キラキラネーム OK に？」　⑨「叱らず小さな成長褒める」　⑩「園児置き去り 報告急増」　⑪「重い車体、転倒死事故も」　⑫「お絵描きは自分の表現」　⑬「大人も絵本　心通わせる」　⑭「A 一緒にいた時間を思い出す」「B 編集手帳・こどもの詩」

【印象に残った記事　上位５件】

1 位	①「保育士 45 年で退職 幸せだった日々」（18 人）
2 位	⑧「キラキラネーム OK に？」（14 人）
3 位	⑩「園児置き去り 報告急増」（13 人）
4 位	⑫「お絵描きは自分の表現」（7 人）
5 位	④「ちょっと頑張るが理想」（6 人） ⑦「ウクライナの惨状 孫おびえる／子供の問い 教える機会」（6 人）

Ｑ３　Ｑ２で答えた記事は、なぜ印象に残ったのですか。簡単に答えてください。

（例１）【①の記事について】45 年間、子どもたちが好きで保育士を続けたのがすごいと思った。初めは結婚したら保育者をやめようとか、結婚しなくても 3～5 年くらいでやめようと思っていたけれど、この記事に影響を受けてできるところまで続けたいと思うようになったため。

（例２）【⑧の記事について】キラキラネームが絶対にだめと言っているわけではないが、名前をつけられた子どもが大人になっても恥ずかしくない名前を付けてあげるべきだと思ったから。音読みでも訓読みでも、意味と漢字が繋がらない名前は個人的にはどうなのかと思う。

Ｑ４　返却されたレポートと授業者のコメントを、クラスの仲間に転送し、お互いに読み合いました。この学修について、感じたこと、考えたこと、印象に残ったレポートなどについて自由に書いてください。

（例１）自分が思っていたことと全然異なるところに着目しており、新しい発見があった日もあれば、すべてにおいて似たような内容についてまとめている人もいて、理解を深めるこ

とができた。

（例２）自分では精一杯考えた内容でも、先生のコメントはもっと深く掘り下げていて、どれも納得できたし改めて考えさせられることも多かった。

Ｑ５　「保育者・教職原論」の「新聞記事を読む学修」について、感想や要望を自由に書いてください。

（例１）最初は 1000 文字以上書くことが大変だったけれど、終わりに近づくと書けるようになったので、文章力が少し上がったのかなと思う。私は新聞を全く読まなかったが、興味を持つようになった。授業だけでは学べないことを学べてよかった。

（例２）新聞記事の感想を毎週レポートするのは大変だと感じてしまった部分もあるが、やることで、文章を書く力もつき、話し言葉と書き言葉について改めて学べる場にもなったのでよかった。

3-2　基準文字数と人数割合

レポート作成の負担に対する配慮と、ある程度の長さの文章によって自分の考えをしっかり表現する力の育成と、相反する問題を解決するため、評価の基準とする文字数を 3～4 回を区切りとして少しずつ増やしていく方法をとった（表２）。評価の基準とした文字数と、それぞれの人数割合を、初めの 3 回と最後の 4 回についてまとめてみた（表３）。

表３　授業後レポートの基準文字数及び人数割合の変化

【№1～№3　3 回分の状況】

	合計人数	人数割合
S（1000 文字以上）	203 人	66.3%
A（ 800 文字以上）	27 人	8.8%
B（ 600 文字以上）	39 人	12.7%
C（ 400 文字以上）	25 人	8.2%
D（ 399 文字以下）	0 人	0.0%
未提出（含;欠席）	12 人	3.9%
3 回分合計人数	306 人	

⇨

【№11～№14　4 回分の状況】

	合計人数	人数割合
S（1300 文字以上）	237 人	58.1%
A（1100 文字以上）	38 人	9.8%
B（ 900 文字以上）	44 人	10.8%
C（ 700 文字以上）	45 人	11.0%
D（ 699 文字以下）	1 人	0.2%
未提出（含;欠席）	43*人	10.5%
4 回分合計人数	408 人	

※履修登録者数　102 名

※№11～№14 における未提出 43 名は、途中での資格喪失者 6 名（延べ 24 人分）を含む。

3-3　レポート文字数、評価、コメント文字数の個人総括表の実際

新聞記事の感想を書く 14 回分の取組について、毎回のレポート文字数、評価、授業者コメント文字数を評価基準とともに一覧にして、チャットで送信した。学生はこの資料を活用して各自の取組を振り返り、「最終レポート」作成の材料とした（表４）。

表４　学生に送信した個人総括表の一部

■「保育者・教職原論」授業後レポートの記録　―　新聞記事から学ぶ　―

学生番号	氏　名	項　目	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13	No.14	合計	平均
		文字数	1062	876	1109	1230	1199	1199	1316	1353	1238	913	1347	1336	800	1398	16376	1169.7
		評　価	S	A	S銀	S金	S	S	S金	S	S銀	B	S金	S金	C	S金	-	-
		ｺﾒﾝﾄ文字数	657	523	734	995	1009	882	921	729	1111	601	802	865	724	-	10553	811.8

【評価の基準】

＜No.1～No.3＞	＜No.4～No.6＞	＜No.7～No.10＞	＜No.11～No.14＞
S…1000 文字以上	S…1100 文字以上	S…1200 文字以上	S…1300 文字以上
A… 800 文字以上	A… 900 文字以上	A…1000 文字以上	A…1100 文字以上
B… 600 文字以上	B… 700 文字以上	B… 800 文字以上	B… 900 文字以上
C… 400 文字以上	C… 500 文字以上	C… 600 文字以上	C… 700 文字以上
D… 399 文字以下	D… 499 文字以下	D… 599 文字以下	D… 699 文字以下

3-4　学生の感想レポートと授業者のコメントの実際

Microsoft　Teams のチャット機能を使った感想レポート及び授業者のコメントのやりとりについて、その実際をデスクトップパソコンの画面で示す（図２）。学生レポートは全体の末尾部分である。学生のほとんどは、スマートフォンによるレポートの送受信だったようだが、添付した資料の活用も含めて大きな支障は報告されなかった。

事もいいと思いました。年齢が低い時には絵の成長を感じながら褒めてあげる事を中心に声がけをします。年齢が上がると描きたいものが具体的になっていくと思います。声がけをする際には誉める事もしながら絵の中で足りていないものを教えてあげる事も必要だと思いました。声がけはどんな言葉でどんな口調で言うかで受け取り方が変わってしまうと思うので考えながら声がけをするべきだと思いました。
4つ目は子どもの絵の成長の過程を詳しく知りたいと思いました。
インターネットで調べてみると神戸大学名誉教授の東山明さんの「子どもの絵の発達と筋道」という資料見やすく、わかりやすかったです。保育者にとってためになるページだと思いました。保育者がやるといいことなども書かれていて勉強になりました。わからない事があった時にはインターネットなどで調べてわからないままという事がないようにしていきたいと思いました。

2022年7月9日

2022/07/09 10:14
1,307文字、S（銀）評価。今回の記事について考えたこと、感じたことがよく整理されている。まず2つ目について。「保護者にとってわかりやすい記事」という感想は、色々な意味でとても興味深い。[redacted]さんはこれまで、その記事が誰に対して書かれたものなのかという感覚で捉えることがよくあったのだろうか。だとすればそのこと自体（新聞記事の読み方として）すばらしいこと。そうではなく今回初めてそんな読み方をしたのだということであれば、それはそれで新聞記事の新たな読み方に気づいたという意味でこれまたすばらしいこと。（普段あまり新聞など読まないし…から始まったこの学修だが、読み方という点でも成果が出ているような気がする。）また別のこととして、幼い子どもへの親の対応ということが、[redacted]さん自身の体験を通してレポートされている。今回の記事を踏まえて、自分の幼いときの行動の意味を、親の目線でとらえることができているということ。（もちろん幼い子どものときは、自分の行動についてそんなことを考えることなどできるものではない。）続いて（順序は逆になるが）1つ目について。実は中村個人として「大人からしたら落書きに見えるよう絵」という部分、子どものお絵描きに限らず、保育・幼児教育全体を考えるとき大きな問題を含んでいるような気がしている。これまでの日本の子育てや教育などの伝統の中で、例えば子どものお絵描きが、「ただの落書き遊び」「お絵描きでもさせておけば静かにしているからいい」というレベルで受け止められていた時間が極めて長かったのではないだろうか。子どものお絵描きには、子どもの成長に関わる様々な問題があるとか、したがって保育者はその子どものお絵描きについてどのようなことに注意すればいいのかとか、そんなふうに捉えて研究、実践するようになってからあまり時間がたっていない…。そんな印象がある。他の人のレポートの中に、「イタリアではお絵描きの指導をする専門の保育者がいる。お絵描きのための専用のスペースがある。」などという情報があった。子どものお絵描きに対する考え方に、随分違いがあるような気がしている。その違いの大きさが「大人からしたら落書きに見えるよう絵」というような言葉に象徴されているような気がする。多くの大人が、子どものお絵描きをそんな意識で見ていたことを踏まえて、これから保育者になる人たちは、そうではない保育を進める必要があるのだろう。＜中村＞

今回の[redacted]さんのレポートと中村のコメントは、[redacted]さんと[redacted]さんに送信してください。

図２　学生の感想レポート（の末尾部分）と授業者のコメントの実際（学生レポート 1,307 文字、授業者コメント 1,008 文字、個人名部分修正）

3-5　「最終レポート」に見る、学生の反応

この授業では、「授業後レポート」（授業中に読んだ新聞記事の感想レポート）と「最終レポ

ート」によって成績を評価した。「最終レポート」は、（１）授業を通して変わったこと、変わらないこと　（２）これからの私に必要なこと　（３）授業（学修資料）の中で印象に残っているものについて　（４）新聞記事の中で印象に残っているものについて　（５）全体のまとめ　の 5 項目について、特に授業全体の取組を通した自分の成長や変化、これからの課題に注目してこの授業を振り返る内容とした。このうち（４）は新聞記事を読む学修そのものについてまとめる項目だが、（１）（２）（３）（５）の項目の中でも新聞記事を読む学修と関連付けて記述する学生がいた。その人数は、「最終レポート」提出者 95 人のうち、

（１）の中で触れた学生　14 人
（２）の中で触れた学生　6 人
（３）の中で触れた学生　2 人
（５）の中で触れた学生　23 人　以上合計 45 人（提出者全体の 47.4%）

であった。「最終レポート」におけるそれぞれの事例を、レポートの記述から引用する。

＜（１）授業を通して変ったこと変らないこと　…に関する記述の例＞

私が「保育者・教職原論」の授業を通して一番変わったことは、他の人の意見や新聞に興味を持つようになった点である。授業の初めに新聞記事を読み、感想を個人でまとめた。私は私なりの考えをもちろん持っていたが、授業の中で他の人の感想を聞くと、「そのような考え方もあったのか」とか、「なるほど」と共感する点などが多くあった。そして、授業後のレポートをたくさん書いてきた。先生のコメントを読み、新たな情報も得ることができた。同時にレポートも交換したため、少なくとも二人の意見を読むことができ、私の考えも一つではなくなり･･･（以下、略）

＜（２）これからの私に必要なこと　…に関する記述の例＞

これからの私に必要なことは二つある。一つ目は、自分の考えを文章にする力だ。保育者は仕事量が多く、時間がない中で連絡帳にコメントを書いたり、一日の出来事の記録をまとめたりしなければならない。新聞記事を読んで自分の考えをレポートする課題を通して、少しずつ文章を考える力がついてきたと思う。だが、まだ自分の頭の中にある考えや思いを文章にすることがうまくできず、レポートを完成させるのに時間がかかってしまう。スムーズに文章をまとめることができるよう、これからも文章を書く機会を大切にしていきたい。･･･（以下、略）

＜（３）授業（学修資料）の中で印象に残っているものについて…に関する記述の例＞

私は学修資料⑱⑲の「保育者のストレス」がとても印象に残っている。転職を考えている 20 代の保育士 M 子さんの人生相談の記事（学修資料⑱）を読んで、私は「転職した方がよい」と考えた。（中略）しかし、弁護士の佐賀葉子さんの回答（学修資料⑲）を読んで、「私は自分に甘く、目の前の課題から逃げている。保育者になる覚悟が自分はまだできていない。」と感じた。「職場を変えてみることを候補に入れてみるべきだ。」とも考えたが、「（転職を考え、子どもとうまく向き合えない）そんな保育士は、どこの保育施設でも迷惑するのではないか？」という先生の言葉に、確かにそうかもしれないと考え直すことになった。･･･（以下、略）

＜（５）全体のまとめ　…に関する記述の例＞

「保育者・教職原論」の授業全体を通して、新聞記事からの学びが多かったと感じている。

ほとんどの新聞記事が最近に載せられたものであったため、最近の保育現場でも様子や問題、子どもに関わる実態などについて様々なことを把握することができて、学びが深まったように感じる。また新聞記事の感想レポートの回数を重ねていくごとに、物事を考える力が少しずつ身に付いてきたと感じる。保育士を 45 年勤めあげ、その日々が幸せであったと語っている人の新聞記事から始まり、職場の人間関係や労働環境、子どもと向き合うことに辛さを感じるというストレスから転職すべきか悩んでいる人の新聞記事で授業が終わった。それぞれ様々な保育の形があるのだと思う。･･･（以下、略）

3-6　「授業後レポート送受信の記録」について

今回の取組では、クラスの仲間とレポートを交換し、互いに内容や授業者のコメントを読み合うことで、保育者を目指す者としての視野を広げ新たな知見を得る機会となると考えた。全ての授業が終了した時点で、毎回送受信して読み合った相手の記録を一覧表にまとめて、取組全体の振り返りに活用することとした。枠取りと記入例をデータと紙ベースで配付し、学生が自分の記録を記入、提出した。以下は、その記録の事例である（表５）。学生が自分でデータ入力し提出したものを、個人名のみ修正したものである。

表５　「保育者・教職原論」授業後レポート送受信の記録

■「保育者・教職原論」授業後レポート送受信の記録　　１年（　Ｃ　）組　氏名（　　）

	記入例	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7
自分の記録	９４５文字・Ａ銀	1158文字・S	1225文字・S	1128文字・S金	1228文字・S金	1413文字・S金	1218文字・S金	1346文字・S金
送信相手	中村さんへ	①さんへ	③さんへ	⑤さんへ	⑦さんへ	⑨さんへ	⑪さんへ	⑬さんへ
	４月３０日送信	4月10日送信	4月14日送信	4月21日送信	4月27日送信	5月12日送信	5月19日送信	5月27日送信
	吉木さんへ	②さんへ	④さんへ	⑥さんへ	⑧さんへ	⑩さんへ	⑫さんへ	⑭さんへ
	４月３０日送信	4月7日送信	4月14日送信	4月21日送信	4月28日送信	5月12日送信	5月19日送信	5月27日送信
受信相手	大久保さんから	①さんから	③さんから	⑤さんから	⑦さんから	⑨さんから	⑪さんから	⑬さんから
	４月２３日受信	4月10受信	4月15日受信	4月24日受信	4月28日受信	5月12日受信	5月22日受信	
	９２０文字Ａ金	649文字・B	1770文字・S	1227文字・S	1147文字・S	1446文字・S金	1298文字・S金	
	桐原さんから	②さんから	④さんから	⑥さんから	⑧さんから	⑩さんから	⑫さんから	⑭さんから
	４月２５日受信	4月9日受信	4月15日受信	4月21日受信	4月30日受信		5月20日受信	
	１２００文字Ｓ銅	555文字・C	1102文字・S	1047文字・S金	1136文字・S		1105文字・S金	

	No. 8	No. 9	No. 1 0	No. 1 1	No. 1 2	No. 1 3	No. 1 4
自分の記録	1330文字・S金	1378文字・S金	1337文字・S金	1445文字・S金	1408文字・S金	1598文字・S金	1454文字・S金
送信相手	⑮さんへ	⑰さんへ	⑲さんへ	㉑さんへ	㉓さんへ	㉕さんへ	㉗さんへ
	6月3日送信	6月9日送信	6月16日送信	6月30日送信	7月8日送信	7月15日送信	7月21日送信
	⑯さんへ	⑱さんへ	⑳さんへ	㉒さんへ	㉔さんへ	㉖さんへ	㉘さんへ
	6月3日送信	6月9日送信	6月16日送信	6月30日送信	7月8日送信	7月15日送信	7月21日送信
受信相手	⑮さんから	⑰さんから	⑲さんから	㉑さんから	㉓さんから	㉕さんから	㉗さんから
	6月2日受信		6月18日受信	7月8日受信	7月8日受信	7月18日受信	7月21日受信
	1259文字・S金		1256文字・S金	1640文字・S	1317文字・S金	1330文字・S	
	⑯さんから	⑱さんから	⑳さんから	㉒さんから	㉔さんから	㉖さんから	㉘さんから
	6月4日受信	6月11日受信	6月19日受信		7月10日受信	7月18日受信	
	1258文字・S銀	1136文字・A銅	1217文字・S		1458文字・S銀	1525文字・S	

★レポートを提出しなかった場合、あるいは送受信しなかった場合は空欄のままにすること。
★この記録作成のために、これから送受信することのないように、ありのままの記録を記入すること。

４．考察

4-1　視野の広がり、話題の広がりについて

終了時のアンケートＱ２の回答結果にあるとおり、学修資料として配付した新聞記事の中で、学生が最も多く反応したのは、第 1 回の「保育士 45 年で退職 幸せだった日々」（記事№1）であった。保育者を目指して勉強を始めるときに提示したのが、退職するベテラン保育士の記事だったこともあり、学生には特に印象に強く残ったようだ。45 年間という時間の長さに注目し、「大変だったはずだ」「定年後も続けるなんてすごい」という感想を持つ学生が多かった。資料につけた「手引き」を活用し、仲村さんという保育士にとっての 45 年間を想像したり、「定年、再任用」という、まだ学生にはなじみのない問題についても学生なりに感じたりした部分があったようだ。さらに、「保育者の仕事にとっての子どもの存在の意味（本当に子どもが好きだったのだろう、可愛い子どもがいたから 45 年間頑張れたのではないか…など）」「保育者の仕事を支える家族（息子さんは思いやりのある人だ、保育士の仕事をしながら息子さんもしっかりそだてたのだろう…など）」というような様々な感想を交流することができた。

こうした感想の広がりは、その後の記事についても少しずつ見られるようになった。第 10 回の「園児置き去り 報告急増」（記事№10）では、散歩などの園外活動の際に、迷子や置き去りになる子どもが急増しているという内容について考えた。「子どもの命を預かっているのに…」「園の信用が失われる…」といった感想が多く寄せられ、記事の中にある「福岡県の送迎バス置き去り事故」について、感想レポートを作成するにあたって、自分でネット検索し、情報を集める学生も何名かいた。また事故の原因を考える中で、保育士不足の問題、保育者間の情報連携の問題（授業中に「保育者の専門性」について学んだ後だったことも影響している）を取り上げる学生もいた。授業者からは、記事の読み方として、「事故が急増したのか、報告を求めた結果事故が表面化したのか」「これまで報告されなかった事故はないのか」という視点も提示した。その結果、「信用を失うことを恐れて置き去りの事実を報告していなかったのではないか。」「事実を報告していなかったことが分かれば、置き去り事故があったこと以上に信頼が失われるはずだ。」などの感想が出された。こうした感想の交流、授業者からのコメント、前時の振り返りによるポイントの確認などを通して、一つの新聞記事でも様々な見方があることを、学生自身が実感することのできたようだ。

授業開始時のアンケートＱ２の回答から、新聞記事の中でこれまで学生が注目する割合が高かったのは、事件や事故のニュースであったことが分かる。新聞と言えば事件・事故の報道、あるいは政治関連のニュースというイメージを持っていたのかもしれない。今回の取組は、保育・幼児教育・子育てといった様々な分野の記事、また手記や随想、投稿記事など様々な種類の文章に触れる機会となったようだ。授業終了時のアンケートＱ２の回答から、印象に残った記事の上位 5 点の中で、いわゆる事件・事故系の報道記事は第 3 位の「園児置き去り 報告急増」のみであった。（授業で提示した記事全体の中では、№2「感染拡大、保育現場に影響」、№10「園児置き去り 報告急増」、№11「重い車体、転倒死事故も」などが事件・事故系の報道記事となる。）多くの学生が、新聞記事は様々な話題を取り上げていること、そしてその中には保育者を目指す自分たちにも関わりのある記事がたくさんあることを感じ取ったようだ。

4-2　文章表現の場としてのレポート課題について

最初は「400 文字以上書くこと」から始まり、最終的にはその基準を「700 文字以上」まで引き上げた。段階的に基準を引き上げたのは、学生の負担感、そしてそれによる取組意欲の減退を考

慮してのことだった。しかし実際には表３に示したとおり、半数以上の学生が「Ｓ評価」だった。授業終了時のアンケートＱ５の記述例からもわかる通り、学生にとって決して簡単な課題ではなかったようで、必死で取り組んだというような声も聞かれた。一つは、互いのレポートを転送し合って内容を確認するというシステムが、頑張るための刺激になっていたことが考えられる。「Ｓ評価」のレポートが転送されてくると、それが刺激になるという部分もあったようだ。また、まだ書き上げていないのに、仲間からチェックの済んだレポートが転送されてくることで、「早く書きあげなければ…」という気持ちになったこともあるようだ。実際、提出の早い学生が何人かいるクラスは、クラス全体としての提出時期も明らかに他のクラスよりも早くなるという傾向があった。また、何をどう書いていいか悩んでいる学生にとっては、転送されて来る仲間のレポートが、自分のレポート作成のヒント、参考になっていた部分もあるようだ。

もちろん分量よりも内容が問題になるのは当然だが、多くの分量を書いた学生のレポートは内容も充実していた。文字数の評価基準を意識し、書き方の手引きも活用して多くの分量のレポートを書こうと努力している学生が多く見られた。授業者としても、一人一人の内容に応じてより具体的なコメントを付けるよう努力したが、授業者のコメント内容よりも、コメントの最初に書かれたレポートの分量（文字数）と評価が、取組への刺激になったようだ。文章表現力は、基本的にはより多くの文章を実際に書くことで身に付くと言われる。多くの文章を読むことが、それを支えるということも考えられる。新聞記事を読み、それについて考えたことを文章で表現するのは、その両方の条件を満たしていることになる。ある条件の下で、一定程度の分量の文章を書くということについて、学生の意識を刺激したことは確かである。

なお、学生によっては、レポートでありながら「話し言葉」と「書き言葉」の区別が不明確なもの、いわゆる「ら抜き言葉」や「違かった」などの不適切な用語、一文の長さが長すぎるもの、文末表現が不統一なものなど、内容の問題以前にレポートとしての体裁が不十分なものが散見された。授業者からのコメントの最後に「レポートの書き方アドバイス」として、指導を入れるケースも少なくなかった。こうしたコメントが本人のレポートと共にクラスの仲間に転送される。結果として、少しずつではあるが、レポートの書き方そのものが整ってきた。

4-3　新聞記事そのものについての興味・関心について

「公益財団法人　新聞通信調査会」の調査によれば、18～19 歳の世代で「ニュースを新聞で読む」と答えた人の割合は 28.6%、「ニュースを毎日、新聞で読む」と答えた人の割合は 0%であった[1)] という。授業開始時のアンケートＱ１の回答結果から、新聞を購読していない家庭、学生が全体の半数を超える中で、授業中に新聞記事を読むことは、保育者を目指す学生にとって貴重な機会になるものと考える。

授業終了時のアンケートＱ１の回答結果からは、今回の取組によって新聞記事に対する学生の関心が高まったかどうかが見て取れる。それまでの関心の度合いは学生によって様々だが、回答者 87 人中、合計 79 人（回答者全体の 90.8%）が、今回の学修を通して新聞記事やニュースへの関心が（自分なりにではあるが）高まったと感じていることが分かる。もちろん、今回の取組のねらいは、新聞への関心を高めることそのものではなく、保育者を目指す学生として視野を広め、社会の中で信頼される保育者を目指すという意識を高めることである。しかしそのためにも、新聞への関心が高まったと感じる学生が増えたというのは意味のあることではないだろうか。「最終レポート」の中に「授業を通して一番変わったことは、他の人の意見や新聞に興味を持つよう

になった点である。」「新聞記事を読んで自分の考えをレポートする課題を通して、少しずつ文章を考える力がついてきたと思う。」「ほとんどの新聞記事が最近に載せられたものであったため、最近の保育現場でも様子や問題、子どもに関わる実態などについて様々なことを把握することができて、学びが深まったように感じる。」などの記述が見られるのは、今回の取組の成果の一端を示すものであると考える。

５．おわりに

主に小中学生から高校生を対象に、社会性を身につけ、読解力や思考力を高めるために授業で新聞を活用する取組として、日本新聞協会が推進するＮＩＥ（Newspaper in Education：教育に新聞を）[2)]がある。授業で新聞を活用するという点からすれば、今回の実践はＮＩＥの短期大学生版、あるいは保育者養成校版とでもいうべき内容になるかもしれない。ただし、そのねらうところは、保育者を目指す者としての視野を広げるところにある。授業開始時のアンケートＱ１の回答結果から、この取組を始める前の段階で「新聞を購読していない」「新聞を購読していてもほとんど読まない」「そもそもあまりニュースに関心がない」という状況にある学生の割合（Ｑ１の回答結果③④⑤）は、全体の８割を超えていた。こうした現状を考えれば、たとえわずかな時間であっても新聞記事に接する経験を積むことは、少し大げさな言い方にはなるが、保育者を目指す学生にとって新たな知見を得るための方策になると言えるのではないかと考える。

実際に取組を展開してみて、今回のような形で新聞記事に対する自分の考えたことを文章に書き表し、互いにそれを読み合うという学修を展開することができたのは意味が大きかった。令和 2 年度、令和 3 年度の授業では、コロナ感染防止の対策のために、「自分の考えたことを文章に書き表す学修」と「互いに発表し合って自分の考えを深める学修」を 15 回の授業の前半と後半に分けて取り組まざるを得なかった。15 回の授業を通して「自分の考えたことを文章に書き表す学修」と「互いに自分の考えを深める学修」を継続することでどこまで深めることができるかというのが、今回の実践に取り組むきっかけであった。取組を始めるにあたっては、学生や授業者自身の負担が大きすぎれば「絵に描いた餅」に終わってしまうという懸念もあった。取組を終えてみて、保育者を目指す学生がその視野を広げるために、新聞記事という材料が有効であること、レポートを互いに読み合うことで学びを深めることができることを確かめることができた。

著者の利益相反： 開示すべき利益相反はない。

参考文献

1)「第 14 回　メディアに関する全国世論調査 2021」公益財団法人　新聞通信調査会より
URL…https://www.chosakai.gr.jp/wp-content/themes/shinbun/asset/pdf/project/notification/yoron202houkoku.pdf.../yoron2021houkoku.pdf
閲覧日：2021 年 12 月 30 日

2)「ＮＩＥ 教育に新聞を」より 「ＮＩＥとは」 URL…https://nie.jp/about/
閲覧日： 2022 年 7 月 29 日